

エール 卒業生の皆さんへ

緒方 洪庵 先生

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

中学校3年間の課程を修了され、中学校を巣立っていく皆さんの前途に心からエールを送ります。

卒業生の皆さんは、今、卒業という門出を迎え、本校での三年間の生活を思い起こし、様々な感慨の中に、嬉しかったこと、辛かったこと、苦しかったこと、泣きたかったこと等もたくさんあったのではないのでしょうか。また、どうして自分だけこんなに運動が苦手なのだろう、どうしていくら勉強しても成績が上がらないのだろう、どうして自分の容姿はこうなのだろう、などと悩むこともあったのではないのでしょうか。

それらは劣等感となり、日々皆さんを苦しめ、それと共に3年間の生活を過ごした人も多かったのではないのでしょうか。中学校時代とは人間の発達段階的にはそのような時期と言われます。

ところでドイツの心理学者アドラーは、劣等感こそが人間の成長に重要であると言いました。それはどういう意味なのでしょう。

皆さんは緒方洪庵という人の名前を聞いたことがありますか。緒方洪庵は江戸の末期に侍の子として生まれましたが、生まれつき病弱でした。そのため武士の本分の剣術は全くダメでいつも打ちのめされ。馬鹿にされる毎日だったようです。彼の子ども時代は本当に辛くみじめなものでした。

しかし青年となった時、彼は「どうして自分はこんなに弱いのだろう」、「どうしてすぐに病気になるのだろう」、「人はどうして病気になるのだろう」と考えました。そして刀を捨てて医者になる決意をします。そして長崎、江戸に行き、一生懸命学び、とうとう日本を代表する医師となり、多くの人を病気から救いました。また、今の医学部にあたる塾（適々齋塾、通称「適塾」と呼ばれ、現在の大阪大学医学部に繋がっている。）を開き福沢諭吉、五稜郭城を創った武田斐三郎はじめ、多くの人材を育てました。江戸末期洪庵が灯した近代医学のたいまつは弟子たちによって巨大な炎となり日本を照らしました。日本の医学の近代化は緒方洪庵なくしてはなしえなかったと言われていました。

でも、もし緒方洪庵が健康優良で生まれていたら、医者にはならず、その結果、医学の近代化も進まなかったかもしれません。洪庵の弱いからだが日本を救いました。アドラーも診察の中からたくさんの人の人生をみて、劣等感の大切さを伝えたかったのでしょうか。

皆さんの行く手にはこれからも沢山の試練が待っていることですが、それらをエネルギーに変え、自分の運命に対し、真っ直ぐに前を向いた人生を歩んでいくことを心から願っています。

令和7年3月14日

函館市教育委員会教育長 藤 井 壽 夫